

# 地域子育て支援拠点研修事業「大阪開催」 中堅支援者向け研修

## 〈開催概要〉

- 開催日 平成22年12月5日（日） 10:00～16:30
- 会場 大阪市立大学 生活科学部
- 主催 財団法人こども未来財団・NPO法人子育てひろば全国連絡協議会
- 後援 厚生労働省・(社福)全国社会福祉協議会・大阪府・大阪市
- 協力 NPO法人ふらっとスペース金剛
- 参加者数 180名（NPO/任意団体81名、行政65名、他団体/企業11名、その他23名）

## 〈開催挨拶〉 10:00～10:10

- 主催者挨拶 財団法人こども未来財団 常務理事 安藤哲男さん



- 開会挨拶 NPO法人子育てひろば全国連絡協議会 理事 岡本聡子さん



○プログラム1：基調報告 10：10～10：40

『地域子育て支援拠点事業の概要と展望』

講師：厚生労働省雇用均等・児童家庭局総務課少子化対策企画室室長補佐 鈴木健吾さん



地域子育て支援事業の概要と位置づけ、実施状況、また、国の施策や動向についてデータに基づき具体的な説明がありました。子育て支援を巡る最近の動きとして、「子ども・子育て新システム」についての説明があり、社会全体で子育てを支援するためのサービスを提供したり、新しいシステムづくりができつつあるという現状を伝えられました。

○プログラム2：基調講演 10：45～12：00

『地域子育て支援拠点事業における活動の指標「ガイドライン」について』

講師：日本福祉大学 教授 渡辺 顕一郎さん



利用者主体の視点に立って、支援の質の標準化を目指すための「ガイドライン」の説明がありました。地域子育て拠点事業が多様になっていく上で、「ガイドライン」は実践の核となり活用されていくために設けられました。子育てをする環境が変化していく中で、生活背景を理解しながら、支援者は地域をつなぐという役割を担っている、時には温かく親子を迎え入れ、利用者同士が支え合う関係（ピア・サポート）づくりに取り組むことが大切であるとのことでした。利用者の気持ちに寄り添い、理解し、共感する、さらに自分で決めるということを促すことも大切であるとのことでした。

## ○プログラム3：分科会 13：00～16：30

### ◆第1分科会『拠点スタッフの役割・スタッフに求められる力（応用編）』

参加者 71名

講師：関西学院大学 准教授 橋本 真紀さん

コーディネーター：NPO法人マミーズネット理事長 中條 美奈子さん

#### ①グループワーク「意識面・行動面における課題は何か？」

橋本先生と中條さんから自己紹介があり、中條さんから「ガイドライン」に関するグループワークを行いました。各自が自己評価表にしたがってエピソードを記入した付箋紙を模造紙に貼り、各グループで自己紹介・意見交換・感想などの意見を出し合いました。

各グループからは、

- ・ボランティア、地域との交流があまりできていない（特に行政）
- ・男性（父親）との交流少ない
- ・話のきっかけがわからない
- ・世代間交流が少ない
- ・幼稚園と保育園の連絡・協力ができていない

などの意見が出されました。



中條美奈子さん

#### ②ガイドラインについて

橋本先生がガイドラインと拠点スタッフのあり方について、まとめて説明しました。

- ・作成経緯は、地域子育て支援拠点事業が第2種社会福祉事業になったためであり、拠点事業としては事業主体と運営主体が実施要綱とガイドラインを共有することが不可欠である。
- ・実施要綱では子どものウェルビーイングを保障するための積極的処置を行い、親を支援することが子どもの利益につながる。
- ・支援者は「受容」「自己決定」を尊重して、まず親との関係性において信頼関係の構築を目指すことが大切である。



橋本真紀さん

- ・自己覚知として支援者は自分が、どのような状態なのかを考え、分析は本人で行い、自分の傾向を自覚する。その結果として自分の強みは何かを考え、ストレングスを高めていく。

### ③まとめ

- ・専門機関や地域資源と連携し、まずスタッフ自身何が資源として存在するのを知り、様々な人とつながるために自分も相手の分野に参加し連携をつくりながら事例に対処しなければならない。
- ・拠点事業は場を動かないという性質を理解し、より地元を意識して第一に来た人をきちんと支援することを考えることが大切である。そこから広がりができていく。



### ◆第2分科会『行政と拠点で取り組む虐待予防』

参加者 48名

講師 大阪市立大学 山縣文治さん

コーディネーター NPO法人ふらっとスペース金剛代表理事 岡本聡子さん

事例報告 奈良市保健福祉部子育て支援室子育て課 支援係長 山岡利啓さん

事例報告 NPO法人Msねっと代表理事 北島真理さん



岡本聡子さん

山岡利啓さん



北島真理さん 山縣文治さん

## ①講演：児童虐待と子育て支援

まず、児童虐待についての定義、通告制度、現代の親子の置かれた状況などについて、山縣先生からレクチャーを受けました。子育てをしている親同士や、親と社会との「つながり」ができていないことが、親の不安を増し、「しんどい子育て」、さらには子育て放棄につながってしまう環境があります。そこでの子育て支援のターゲットは、まず利用者とつながること、必要な場合は行政とつながること、そして地域社会全体で「育む」ことにある、といったお話でした。



## ②事例報告：奈良市の虐待予防の取り組みについて

奈良市子育て課の山岡係長が、奈良市の子育て支援の取り組みについて報告しました。奈良市では、民間に委託して「つどいの広場」事業を実施しており、後期計画ではひろば8カ所、センター9カ所・児童館1カ所の数値目標を立てています。それに加えて、公民館などの空きスペースを利用して月1、2回の「子育てスポット事業」を22カ所（後期計画では40カ所に）で実施しています。児童虐待防止は公民協働の典型というべき仕事で、市と関係機関が一体的な援助をする必要があります。ただ、現時点では要保護児童対策地域協議会に、NPOはまだ参加していません。

## ③事例報告：ひろばや電話相談で出会った親のしんどさについて

次に、奈良市の3カ所でひろばをコーディネートしているNPO法人Msねっと代表理事の北島さんが、ひろば事業や電話相談で出会った親のしんどさについて発表しました。奈良県は、親子が2人きりになる時間が最も多い都道府県です。ママ自身が心療内科に通っていたり、DVを受けていたり、子どもに発達の遅れがあったり、といったケースもありました。そうした支援が必要な気になる親との関わりの中で、スタッフと利用者の関係の取り方や、行政に伝えるべきかどうかの判断など、難しい問題が起きています。守秘義務を共有して、情報の共有、それぞれの役割分担をしていくためにも、行政との信頼関係が大事です。

## ④虐待予防における行政と拠点の連携

続いて、行政と子育て支援拠点の間に、どれ位の連携があるのか、会場と登壇者がやりとりをしました。要保護対策地域協議会に参加している拠点事業は行政直営の拠点を含めても5つほどでした。行政同士は守秘義務の共有がしやすくケースについての連携もとりやすいのに対し、民間の間では工夫が必要になる、担当者が変われば連携が続かない、といった問題も報告されました。



## ⑤行政と拠点の連携の実際

それぞれの地域でどんな連携をしているのか、会場から報告してもらいました。

- ・保健センターからひろばに出張検診にくる
- ・要保護対策地域協議会の実務者研修（年2回程度）に参加している
- ・気になる親子がいたらひろばに担当保健師が同行する
- ・保健センターから定期的に来てもらう

などの事例が挙げられました。

## ⑥まとめ

- ・虐待予防に「連携」が必要だということを確認
- ・地域や組織によって連携の方法、連携具合がかなり違うことを知る
- ・それぞれの「あたりまえ」のズレをうめていくことが重要
- ・めげずにつながり続けることの大事さ

## ◆第3分科会 「拠点と地域の連携で深める子育て支援」

参加者 42名

講師 NPO法人びーのびーの理事長 奥山千鶴子さん

事例報告 NPO法人子育てネットくすくす 理事長 草薙めぐみさん

事例報告 社会福祉法人大阪水上隣保館 ファミリーサポートひらかた  
チーフ 山下裕美さん

事例報告 NPO法人せたがや子育てネット 代表理事 松田妙子さん



奥山千鶴子さん



山下裕美さん 松田妙子さん

## ①事例報告

草薙さんからは 善通寺市の特徴や地域子育て支援ひろばの概要、中学校との交流活動として月1回中学生とのふれあい活動など。すべての子どもが健やかな成長や育ち すべての子育て家庭が地域の中で安心して子育てができるように、どの子育て家庭も支援者に受容されることで次の一歩をふみだすことができると報告がありました。



草薙めぐみさん

山下さんからは、地域の特徴、ファミリーサポートひらかたの事業紹介、身近な人による身近な支援をするため、ひらかた子育てサポーター養成、地域のさまざまな支援者との学びの場としてひらかた子育て支援講座などを開催されている。その他の事業として親のリフレッシュのために、ショートステイを月 40 件ほど受け入れている。子育て家庭により近い存在であるからこそ子育てを楽しいと思ってもらえる。子育てに自信をつけてもらえるようなゆるやかな支援を目指していると報告がありました。

松田さんからは、世田谷区の特徴(1年間に 7000 人子どもが生まれる、保健センター5 つ、児童館 25)の説明、学生や高齢者のかたなど子育て世代の方達以外の人々ともつながり活動を行い、「人はふれあって育つ」地域の人と子育て中の人達がつながり子育て中の人ができるようなまちづくりを目指している。UR都市機構の集合住宅を拠点に他世代のコミュニティづくりにも取り組んでいると報告がありました。

## ②質疑応答・ワーク

質疑応答では、活動の上での苦労話を教えてほしい、といった質問があり、行政との連携が難しい、との。答えがありました。その後、7つのグループに分かれて、自己紹介を交えグループワークを行いました。

「自分達の拠点に来てないんじゃないかな」という人達を各自ポストイットに記入し、模造紙に貼り出して共有し、その中からグループ内で話し合いたいテーマを1つ選び、その人達を拠点に来てもらうにはどうしたらいいか、アイデアや連携先などを話し合いました。



その後グループ発表が行われました。その中で人とかかわるのが苦手なママ、子どもがやんちゃすぎるママが多く、子どもがやんちゃすぎるママには「やんちゃデー」を作るなど、いろんなアイデアが出ました。

## ③まとめ

- ・ひろばに初めて来た時、スタッフからも利用者からも受け入れられている雰囲気
- ・いつも肩身のせまい思いをしている人が、自分が安心して出せる場所へ
- ・人口や出生数、自分たちの地域の特徴など基本的な情報を把握
- ・ひろばでできることの見極めと、普段から関連機関と顔の見える連携を
- ・ひろば利用者に寄り添った発想を大切に (やんちゃデー、アラフォーの会など)